

Welcome to manacater Dungeon
beginning novels series

食い放題 ダンジョン ようこそ!

Volume

1



「小説」
「新」
「しり」
「り」

試し読み版

一年新

hitotose arcata

関東のどこかに潜むアナログゲーマー。2mの体長、120kgの体重、緑色の肌と赤く光る目を持つというがそれは誤情報です。街で見かけても石を投げないでください。

しりー

siri

長年の憧れだった挿絵のお仕事をさせていただきファンタジーに片足を突っ込んだ気分でございます。力の限り全力で挑んだダンジョン、最深部までご堪能頂ければ幸いです!

Welcome to monster Dungeon
beginning novels series



Volume

1

小説
一年新
イラスト
しりー



BEGINNING NOVELS



Contents

beginning novels series welcome to man eater dungeon
story by hitotse arata · illustration by siri

1

序章	人食いダンジョンへようこそ！	7
第一章	災禍呼ぶ血筋	12
第二章	禍炎の夜	41
第三章	悪党の準備	63
第四章	赤鳥、侵入	86
第五章	鳥の堕ちた日	114
第六章	水門都市エブラム	148
第七章	遠征軍	171
第八章	攻略戦、謀略戦	212
第九章	世界を裏切って	259
終章	さらば、人食いダンジョン	289
書き下ろし	閑話・朝寝坊の治し方	299
特別付録	キャラクターデザイン案	316

序章 人食いダンジョンへようこそ！

君は「地下迷宮の支配者」と聞いたら、どんな者を想像するだろう？

迷宮の奥に閉じこもり、魔界からモンスターを召喚しては世に解き放つ邪悪な魔王？

トラップの研究に余念がなく、邪悪な研究にいそしむ陰險な魔術師？

その想像は半分くらいは当たっていて、残り半分は当たっていない。なぜ僕がそれを答えられるかというと、今君と話している僕自身が、いわゆる地下迷宮の支配者だからだ。

もちろん、正義の味方ではない。教会や領主たちからは魔王のように扱われているけど、残念ながら僕には魔族の血は半分しか流れていないし、育ちはこの世界だから、魔界のルールなんて言われても何も知らない。

邪悪な行為は……まあ、一部は否定できないけど、

喜んでやっているかと言われると、ちょっと反論したい。僕だって好きこのんで、腐りかけのゾンビなんかを使いたくはないんだ。

だけど、あいつらは経費がかからないから、財政には非常に優しくてね……スケルトンも同様。ゴーレムも維持費がかからないし、うちにも少数いるんだけど、すぐに作れるわけじゃない。それなりに初期投資が必要なんだ。

僕には厳しくも有能な教育係がいてね。この手の「魔族のたしなみ」を習っている最中なのさ。

世間一般の人は、変な呪文を唱えたらすぐに魔物が湧いたり、火の玉が飛んでいったりすると思ってるだろうけど、当然そうじゃない。なににせよ時間や金や魔力がかかって、それは無尽蔵に湧き出すようなものではない。色々苦労はあるものなんだけど……

「ご主人様ーっ！ 鉱山村の地区が突破されましたっ！」

「ちょっと、どうするのよ!? 聖堂騎士なんて名前だけのお飾りだと思っただけで、結構手ごわいじゃな

い!？」

……今部屋に飛び込んできた二人には、君も昨日会っているだろう。僕のメイドたちだよ。二人とも元冒険者だっただけあって、攻め込んできた連中の強さは大体実感できてみたいだ。

元冒険者、つてところが気になったのかい? ……
「魔物のくせに」つて?

この二人も、元は半年前くらいに僕の住処を荒らしにきた冒険者だったんだ。だから、メイドのしつけな
んでできてないし、元は仲が悪くつてねえ……え、聞
きたいのはそこじゃない?

なぜ魔物になつていいのか気になるんだね。そりゃ
簡単な、僕が魔物にしたんだ。

うん、まあ……予想がつくと思うけど、捕まえてか
ら僕の精を与えて、ちよつと儀式をしてね。

「悪魔は人間を墮落させます」つて教会で習わなかつ
た?

僕は小さいころ、この村の教会で習つたよ?

僕だけじゃなくて、それなりに力の強い魔族だった

ら、結構できる奴は多いらしいよ。

もちろん、僕は本人の意思を無視して相手を魔族に墮とせるほど強くないから……精神的に屈服させたりしてから精を注がないとダメなんだけどさ。

「あのときのご主人様、情熱的でしたあ……」

「ば、馬鹿! 何こんなときにそんな話してるのよ!」
うるさいな、今は僕がこの人に話をしてるから……
こら、ズボンを下げようとしな!

え、ああ、聖堂騎士か。うん、一筋縄じゃいかないし、全滅させても困るんだ。

なぜかという……、あ、二人とも、その水盤を
持つてきてくれるかな?

ありがとう……これで君にも見えるかな?

僕はもともと人間の中で暮らしていたんだけど、この血のおかげか、生まれつきちよつとした魔法が使えたんだ。わずかだけど、魔力付与の才能があつてね
……付与エンチャント魔術師つてほどではなかつたけど。

親が死んでからは、道具や武器に魔力を付与しては、傭兵や山師、行商人に売りつけて暮らしていたつてわ

けさ。

生まれは違うけど、育ちはこの鉾山の村だよ。今では生きる屍と魔物の徘徊する危険な場所だけど、最初にこれをやったのは、僕じゃないんだけどなあ……。まあ、結果を利用させてもらったのは事実だけどね……。つと、また話が脱線したね。

これは魔法の道具の一つで、遠見の水盤。たいした距離じゃないけど、遠くに設置した「目」となる物から見える風景がこの水盤に映るって道具なんだ。

今の僕の力だと、せいぜい鉾山の入り口とか、十分程度歩くくらいの場所までしか届かなくてさ。こんなとき以外は、玄関に来た客の顔を自分の部屋で見るとくらいしか使っていないだよ。

おや、顔色が変わったね……。うん、君が拠点の中を調べてるのも全部見てたよ。僕の古馴染みの傭兵の紹介状を持ってくるまではよかったけど、その後がよくなかったね。あの人たちは僕が昔からこういうことができることはよく知ってるし、それを君に知らせないわけがないんだ……。本当に信用していい相手なら、ね。

……正直、よくできた偽造だと思うよ。ちよつとよろしくないこともする旅の行商人、つてのは決して嘘じゃないだろうけど、本業は違うよね？

……身体がうまく動かないと思うけど、気にしないでいいよ。普通の毒や薬とは違う、身体の動きを鈍くする薬がゆつくり効き始めているところだから。商品として流通させるには、保管が難しいんだけど……。その分知られてないから、君みたいに毒に耐性がありそうな子を相手にするときには重宝するよ。そう思わないかい、暗殺ギルドのお嬢さん？

利尿作用が強いから、漏らしちゃうかもしれないけど……。まあ、君は客人だから、それくらいの粗相は許すよ。

……ああ、ちょうど映った。今、聖堂騎士とその配下の兵士たちが坑道の入り口を突破したみたいだ。とほほ、ストーンゴーレムを作るのに結構かかったんだけどなあ……。

うん、君もわかると思うけど、今回来ている兵士の構成はたいしてよいものではないんだ。

そこそこ腕が立つ傭兵と、明らかに錬度の低い民兵が混在しているのは、兵士たちの装備が統一されていないのを見ればわかるでしょ。領主や貴族たちの対立のあたりで、ろくな兵力もなく派兵させられたんだらうね。正直捨て駒みたいなものさ。

それで損害を減らしつつここまで来ているんだから、指揮官の能力は高いんだらうね。損害を出さないように気を使っているからこれだけのペースなんだらうけど、あの娘に兵士を使い潰す気があつたらもつと怖い相手だらうね。

ああ、気がついた？

そう。君が僕たちに拘束されている理由はそこ。僕はあの指揮官の娘を知っているんだよ。あつちは僕がここにおいて、魔物の親玉やつてるなんて知らないだらうけどさ。君たちは……おそらく、敵対する勢力の貴族に雇われていて、ここであの娘に死んでもらう予定なんだらうね。

ここに「取引ができるダンジョンマスター」がいる

ことは、そつちの界限なら知っている奴も多いだらうけど……政治的な暗殺の道具に僕が使われるようになったとはね……有名になるのも問題だ。まあ、僕も殺される気はないから撃退はするんだけど。

君たちは彼女に生きていてもらつては困る。でも、僕はちよつと別の理由があつて彼女を僕のものにした。そこにちよつとした違いがあるのが、悲しいすれ違いになつたね、暗殺ギルドのお嬢さん。ああ、震えなくていい。君がへまをしたからつて、落ち込む必要はないよ。ギルドに戻つてドヤされる前に、君はここで死ぬか……墮ちるからだから。

おや、なんで怖がつているの？ 来る前に、このダンジョンのことを何度も聞かなかつた？

この二人がここに来たのは、僕に情報を知らせるためだけじゃないんだ。君が僕が墮とすための下準備をしに来たんだ。

「お客様も、一緒に主人様のものになりましたよ！」
「あんたもへマしたわね。あたしみたいな天才でもやられちゃつたんだから、あきらめなさい」

まあ、君が「素直」になるまで少し時間がかかるだろうから、それまでちよつと昔話でも聞かせてあげようか。あの娘がこの村に住んでいたころの話とか、君の先輩になるこの二人がどうやって堕ちたのか……とか。

泣かなくていいんだよ、生き方が少し変わるだけさ。

僕だって、一年前まではこんなことになるなんて思ってもいなかったわけだし。人生は波乱万丈。誰にとつても、一寸先は闇だ。

……さあ、哀れな犠牲者よ。人食いダンジョンへようこそ！

第一章 災禍呼ぶ血筋

母が事故で死んだその日、残された僕はちょうど成人として扱われる歳になった直後だった。

当時付き合っていた男と遠乗りにでかけ、酒に酔って愛人ともども崖から落ちたことが原因だった。かなり酔っていたようで、正直自分が死んだことに気づいたかどうかすら怪しい。

若いころは傭兵として過ごし、多くの魔族と戦い、英雄とも呼ばれたことがあったらしい人物の最期としてはあまりにもあっけなく、それでいて母らしい死に方だった。

当時のことは知らないが、酒と色事を愛し、人生を樂しむことをためらわなかった母のことだ。老いと病で緩やかに衰えていくよりも、案外本人としては本望だったのかもしれない。

僕が生まれて間もないころ、母は僕を抱えてこの山奥の村にやってきて、村はずれで酒場と宿屋を開業し

た。鉄の鉞脈があることが知られている以外は何もない、山奥にある小さな村だ。母は危険な動物やたまに出る魔物を倒すことのできる実力を持った戦士であり、なおかつ時には村の男を樂しませてくれる酒場女だったため、母の存命中は僕の変わった外見に関してもとやかく言われることは少なかった。

幼心に自分がマザコンになったようで不満だったが、影響も実際大きかったからあまり文句も言えない——人間ではない証の小さな角があるおかげで、僕は村の中で嫌われていたからだ。

母は若いころとある国の英雄の一人で、勇者の称号を受けて魔界に攻め込んだ軍勢の一員だったらしい。

それがどの程度の軍勢で、どんな地位にいたのかは知らないし、母がそれを語ることもなかった。ただ、その結果はわかっている。軍勢は壊滅し、母は魔族に捕らえられ、犯され、魔族の子供を身ごもった。それが僕だ。

魔族とのハーフなんて、教会権力の強い地域にいた

らそれだけで火あぶりになりかねない。人間の世界の裏側にあるといわれる「魔界」がどこにあるのか、僕は知らないし興味もない。だが、母はそこから逃げ出し、僕を育てるためにこんな田舎にやってきた。

そんな生まれだったし、その外見のために村の子供からもつまはじきにされていて、友達ほぼいなかった。遊び相手は自然か書物か、母親の客でもある流れる者の傭兵たちが多かった。

傭兵たちはすねに傷持つ者も多く、僕が半魔族であることを気にする者もほとんどいなかった。今考えればそれなりに可愛がってもらったようで、呪い師の傭兵から魔法を習ったりもした……基礎を習っただけで、何かできたわけもないけれど。

そんな自分に唯一できた同年代の友達、毎年夏にこの村にやってくる女の子ただ一人だけ。

光を浴びるとちよつと緑色にも見える、きれいな黒髪の子。彼女だけは、僕の角を怖がりも馬鹿にもしなかった。

彼女は夏にしかこの村にいないことから、やっぱり

村の子供たちからは浮いていた。だから、彼女とは自然と仲良くなった。僕は夏が好きになった。

母親がこの村の出身だったことは聞いたけれど、父親のことは聞いたことがなかった。彼女は普段都会に住んでいて、大きな建物のことや、きれいな教会のこと、商品が山のように詰まれた大きな市場のことなどを教えてもらった。

その代わりに、僕は彼女に森の歩き方や獣道の見分け方、傭兵や流れ者が使う抜け道や虫の捕まえ方を教えた。宿の屋根裏部屋で、一緒に本を読んだりもした。そんな楽しい夏は五年ほど続いたが、終わりはあつけないものだった。ある夏の終わり、彼女は泣きながら「もうこの村に来れなくなる」のだと告げて、それ以降この村に来ることはなかった。それが、僕にある唯一の友達記憶だ。

彼女の母親が領主の屋敷に仕えていた侍女で、領主のお手つきになって生まれたのが彼女だった。領主の愛人として囲われていた母親が流行病で倒れ、「父親のわからない領主の姪」として都会に引き取られて

いったのだということを知ったのは、僕がもうちょっと成長してからだった。

母が死んでからは、稀にやってくる旅人や行商人、母の古いなじみの傭兵たちが来るときのみ営業する宿を住処としながら、一人で生きていく道を模索しなければいけなかった。

何せ、母が死んでからはなじみの客も減り、たまに来る傭兵や行商人のみの商売では利益はないも同然。加えて、母親がいるときは別だったが、僕は村の一員とは認められていなかった。

これは何も特別なことではない。古い村ではよそ者は嫌われるのは当然のことだ。母は実力で村人に認められていたし、衰える前に死んだからよかつたかもしれないが、村の男と結婚するわけでもなく老いて動けなくなれば、やはり村からはじき出されることになったかもしれない。

それに、僕はただでさえこの角のおかげで嫌われていた。母親が残してくれた財産が少しあったので、つ

つましくすれば三〜五年程度は暮らしていくことはできるだろうが、それ以降は何もない。嫌われ者が農夫になるのも無理だろう。

……皮肉なことに、僕の生活を守ったのは顔も名前も知らない父親の血だった。

世界には、少数ながらも魔法が実在していることは知られていて、魔法を使うだけでは教会が火あぶりにするようなことはない。こんな田舎では縁がないけれど、都市に行けば、魔法の術や知識をまとも学習する「学院」という場所まであるらしい。

とはいえ、魔法は一定以上を個人の才能に依存する技術であり、魔法の才能がある人間なんて百人に一人もない。枯れ草に火を放つだけの力でも、人間には使うことのできない力だ。魔法を使える人間なんていうのは、そのさらに一部でしかないのだ。

……ところが、魔族はその多くが多少なりとも魔法を使う。だからこそ、魔法は「魔族の使うもの」という偏見が根強く残っているのだ。

魔族との混血である僕には、ほんのわずかだが魔法

の才能があった。この力を使って何かできないかと、なんとか村の共同墓地に葬ってもらうことのできた母の弔いからの帰りに道に思いついた。

吟遊詩人の歌に出てくるように、火の玉を飛ばすとか、川を凍りつかせるとか、やり方もわからないまま色々と試してみたけれど、当然ながらまったくできなかった。燃えやすい枯れ草をたくさん用意して、何十分も念じて、へとへとになるころにようやく火がついた。これなら火打石を持つてきたほうが百倍早い。

結局、色々試した結果、僕にできたのは魔力……魔法の力を何かの物品に加えることだ。

石に魔力を加えると、その石が軽くなったり、ちよつと硬くなったりした。

うまく説明できないが、どういう風に変化させたいのかをうまくいこと制御できるようになるまでに二年かかった。

独学でやっていたのだから、その辺が下手なのは勘弁してほしいが、この二年が長いのか短いのかは比べる対象がないから判断できない。

それまで、何着の「見た目よりも重くて壊れやすい服」や何本の「何かを叩くとすぐ壊れる木の棒」を作ってしまったか、あまり思い出したくはない。練習に使った石や木の枝に至っては、たぶん小山が一つ埋まるくらいダメな結果を生み出した。

それでも、三年目には「見た目よりも少し軽い鎧」や「見た感じ短く見えるけど、少しだけ刃先が遠くに届く剣」を作ることができるようになった。

品目に物騒なものが多いのは、こんな商品の需要があるのはある程度金を持っていて、装備品に投資をできる傭兵や冒険者（と、それを扱う商人）くらいしかないからだ。とにかく作るのには時間がかかるし、失敗することも多いのだ。

焦げ付きにくい鍋なども作れるようにはなつたが、村人にはあまり歓迎されなかった。

傭兵たちに聞いたところ、こういう魔力によって強化された道具を作るとを魔力付与と呼ぶらしく、都会には学院で学んだ付与魔術師エンチャンターもいるのだそうだ。

理屈がわかれば、魔力付与が成功する確率も高くな

ることは経験的にわかってきたので、色々な書物を買ったり読んだりするように、色々と小便利な物を作れるようにはなった。

母は文字の読み書きだけは念入りに教えてくれたので、このときは本当にそれが役立った。

本格的に学んだ付与魔術師には到底及ばないだろうけど、それでも、王侯貴族がこぞって依頼するような学院の魔法使いとは違い、こんな辺境の村に、それなりに安価に——都市に比べると、本職の付与魔術師の作るアイテムに比べれば破格の安さだろう——魔法の道具を作ることができる人材がいるのは、傭兵たちにはよほど便利だったのだろう。鍛冶屋とまではいかないが、簡単な武器防具の修理もできるようになっていたのも、そちらでも便利に使われていたことは間違いないが。

母親がいた当時から付き合いがある傭兵たちも、生き残った人たちはそれなりの立場にある者がいた。僕は傭兵や冒険者になったわけではないが、村の近所での仕事の際は同行させてもらい、武器や防具に関す

る実地での訓練も受けたし、どういう物が必要とされるのかの調査もした。

正直に言えば、僕には戦士としての才能はなかった。だが、最低限の戦闘訓練ができたのもいい経験にはなった。彼らと彼らの知り合いに顔を売り、試しに安価な商品を譲り、それを使って傭兵仲間に宣伝をしてもらったおかげで、細々ではあるが商売は軌道に乗ってきた。

付与魔術師なんて名乗るのはおこがましいが、僕は「山奥の宿の主人兼、魔法道具の商人」としての生活を始めていた。

あの女がやってきたのは、母が死んで三年が過ぎ去ろうとしていたその夏のことだ。

※ ※

「夜分、失礼します……この宿に、ウイスタリアのアムローザという人物はいますか？」

あまり来客の多くない夏の夜、普段は使われない宿の扉が開き、そんな声が聞こえてきた。

ややハスキーな声からすると、若い女。呼ばれた地

名はわからないが、アムローザというのは死んだ母の名だ。こんな田舎の町とも村とも言えないところだが、傭兵たちのネットワークは案外広い。傭兵仲間だったならば、母が死んだことは知っているはずだ。

宿の入り口に仕掛けた監視用の魔法道具——小さなガラス玉から見える風景を映した水盤——には、フードを目深にかぶった修道女風の女が映っていた。周囲を確認するが、近場に隠れている仲間もないようだ。「どちら様ですか？」

工房と言うにはあまりに小さい作業場を後にして、宿の厨房へと入る。盗人ならば声はかけない、押し込み強盗ならばまず一人では来ない。

「あなた、アムローザの今の男？」

その女の第一声は、修道女風の外見からはかなり違和感があった。なおかつ唐突で無礼な話ではあるが、言葉を発した本人はそのことに一切の違和感も自覚もないようだ。

フードで顔はよく見えないが、少なくとも死んだ母よりはよほど若く見える。自分と同程度か少し年上程

度だろうか。修道衣によく似た厚手の貫頭衣は、一見地味ながら高価な素材を使った物であることが予想でき、女がよく発育したボディラインを隠すことはできていない……というか、よりくつきりと見せている。正直、長旅に向いているとは思えない。

手に持っている荷物も少ないし、どこから来たのかはわからないが、衣服も靴もろくに汚れていない。つまり、警戒すべき相手だ。

とはいえ、まだ相手は客としての礼儀を崩してはいない。自分もそんなわけありの客をすべて断れるほど裕福ではない。まずは相手から情報を聞けるだけ聞いてみるしかないだろう。

「申し訳ありませんが、アムローザとはどのような関係でしょうか？」

自分の声は営業用としては及第点の声だったと思う。「まあ、昔の知り合いみたいなものよ。遠くから来て、疲れているの。早くアムローザを呼んで頂戴」

嫌な予感がひしひしと高まってくる。母が死んだことを知らず、外見が若い（おそらくはそれなり以上の

容貌の) 女が、お供も連れずにこんな田舎町に来るなんて常識的でありえない。作業用でもあるが、角を隠すためにかぶっている帽子の位置をなおす。

「アムローザは、三年前に事故でこの世を去りました。あなたはアムローザとはどのような関係で？」

親子ほどに歳が離れているように見えますが、という言葉は流石に口に出さなかった。

相手の反応を見て逃げるかごまかすか決めようと思っていたのだが、相手の反応は予想以上に激しかった。

「うそ?! あのアムローザが死ぬなんて信じられない!」

その拍子に、貫頭衣のフードがはずれて女の顔があらわになった。

肩まで伸びた、緩く波打つ薄い蜂蜜色の長い髪の毛を焚き込んでいるのか、わずかに甘い匂いのする肌。驚きに見開かれた目には、普段は伏し目がちなのだろう長いまつげと同じこげ茶色の瞳。清楚な神官のような顔をしているのだが、見ているだけで欲望をかき立

てるような色気を発している。

自分の中の冷静な部分が「こいつはまともな相手ではない」と考えているが、そのときの思考の大半は「この女を押し倒してその肉体を思うがままにしたい」という衝動に占められていた。

その衝動に耐えていられたのは、おそらく相手に襲わせる気がなかったことと、僕に多少なりとも魔術の知識などがあって、自分の精神を律する方法をかじっていたこと。そして、このとき僕はまだ童貞で、何をすればいいのかわからず戸惑っていたことが影響していたのだろう。

僕の股間は、意識する前に既に期待に満ち溢れていた。そんな状態の僕が冷静さを取り戻そうとするより先に、女はもう冷静ではなくなっていた。

「なんで、なんでそんな簡単にくたばるのよあの女! あたしの予定が一気に狂ったじゃない!」

強気に振舞おうとしているのか口汚い言葉を吐き出しているが、女が動揺しているのは自分にすら見取れた。

この女は焦っている。なぜだ？

「あなたは誰で、母とはどんな関係だったんですか？」

この言葉を発してしまったとき、自分のうかつさに激しく後悔した。

しかし、自分が何か取り繕う言葉を探すより早く、女が動いた。突然飛び込んできて、自分に抱きついてきたのだ。

襲われるかもしれないと思っていたが、まさか全体重を乗せて抱きつかれるとは思っていなかった。名前も知らない女と自分は抱き合う形で宿の床に倒れこんだ。

※ ※

「あなた、アムローザの子供なの？」

自分に馬乗りになり、女が言葉を発した。

気のせいかな、女の姿が二重写しになり、髪や瞳の色が赤く見えた。

「あなた、確かに見てみればアムローザと同じ肌と髪の色ね。その瞳の色はあのお方譲りかしら……ねえ、その帽子を取ってくださいさらない？」

女は自分が一体どういう体勢になっているのかを気にしてもいまいように、目をきらきらさせて問いかけてくる。瞳の色は既に赤くなっている。ようやく、この女が幻覚の魔法で髪や肌の色を変え、変装していたことを理解した。

「ということ、魔族……？」

自分の言葉には、おそらくはつきりとわかるほどの恐怖が含まれていたと思う。

それでも、恐慌状態にならずに済んだのは、ありていに言えばこの女魔族がまるで子供のようにはしゃいでいたからだ。

帽子を取って角を確認すると、女はまるで宝物を見つけたかのように小さく歓声を上げた。

「やっぱり！ あなたはアムローザとあのお方の忘れ形見なのね！ よかった、ここにきて本当によかった……！」

そのころになって、ようやく多少の冷静さが戻ってきていた。

それでも僕の胸には女の柔らかな胸が乗っかってお

り、腰に相手の太ももや股間が密着した状態なのだ、完全に冷静でいることは難しい。

「つまり、あなたは魔族……ということですか？」

「ええ、あなたを探していたの。詳しいことはあとで話すとして……」

女の指が、自分の胸をなぞるように触る。気がつけば衣服の前半分は剥ぎ取られており、女の手は胸板をくんだり、ズボンの腰紐を片手で器用に解いていた。

「せっかく会えたんですもの。せっかく、あなたがあたしを欲しがってくれているんですもの」

生殺し状態だったペニスが空気に触れ、衣服による押さえがなくなったために空中にそそり立つ。同年代の村の男たちと比べたこともないが、人並み程度のサイズ……だと思ふ。

女の指が優しく絡みつくのと、我慢できずについ声が漏れてしまう。なんとなく恥ずかしい。

女は氣をよくしたのか、ゆつくりと指を上下させながら上半身を起こし、僕のペニスに顔を近づける。

「まずは、あなたの精を私に注いでくださいませ……」

私のご主人様」

その口調は、先ほどまでの蓮つ葉なものとは違い、修道女と言ってもおかしくはない丁寧なものだった。ただし、その言葉の内容はまともではなく。その言葉が終わるとすぐに、ペニスの先端は温かい粘膜に包まれた。

実際にはそんな大きな音はしなかったのだろうけれど、じゅぷりと音がしたように感じた。

彼女の唇に飲み込まれた、その事実に関頭の中が真っ白になる。

冷たい外気に触れたペニスが粘膜に包まれると、一気に全身の温度が上がったように感じて、思わず声を上げてしまう。

温かい口腔の中で、細く長い女の舌がペニスに絡みつくように丁寧に舐め回す。それが終わると、まるで猫がミルクを舐めるように、音を立てて外周部をゆつくりとしゃぶっていく。時折、舌先を竿に残したまま、肉厚の唇が付け根や玉袋をほおばり、唾液まみれにしてい

混乱と快感に腰が跳ねる。思考は乱れ、腰を押し付けたいという欲求で頭の中がいつぱいになる。直接龟头と竿に与えられる暴力的な快感と、側面から与えられる柔らかい快感に流され、腰に熱いものが集まる。射精感が高まる。

それなのに、達する寸前に唇が離され、もどかしい状態のまま待たされる。

しなやかな女の両腕は、逃がす気がないとも言えるが、女が自分の腰に回されている。横向きになっているが、女が自分の腰に抱きつき、顔を股間に埋めているのだ。これでは、自分で動かすこともできない。

時折、女は上目遣いにこちらの様子を窺うが、そんなことに気がつけるほど自分は経験豊富ではない。彼女の思うがままに快感を与えられ、寸止めになつては切なげに腰を押し付けることしかできない。

「ご主人様、女を抱いたことはいませんか？」

顔を上げ、鈴口を舌先でチロチロといじりながら女が聞いてくる。

「こんな……田舎町でっ、こんな混じりものが、どう

しろって……言うんですかっ……」

性欲がないわけではない。けれど、この田舎町では商売女自体が稀であり、商売としてその需要を満たせるのは自分の母だけだった。最初っからその選択肢はなかった。

母が死んでからは、鉾山の開発を進める男たちは時折連れ立って近隣の街に女を買いに行っていたようだが、そこに自分の入る席はない。

農夫たちでそもそもそんな余裕がある者は稀だ。自分の妻がいらない者は、自分と同様に満たされぬ欲望を抱えて生きていくのだろう。

村には親が死んで孤児になったり、夫に先立たれて生活力を失った女を村全体の所有物として囲う風習があるが、やはり村の一員ではない自分にはその機会もない。たとえその相手から好意を向けられていたとしても、魔族の血を引く自分が抱いてしまえば自分にも相手にも不幸しか待っていない。

だから、半ばあきらめていた。いつか金がたまって、この村を出てどこかの都市で商売を始められるように

なるまでとは、あきらめるよう自分に言い聞かせていたのだ。

「うふふ……我慢なんか、しなくていいんです。あなたはもつと欲深く、強くなってもらわなくてはいけませんから。こんな村滅ぼして、すべての女を犯して殺してしまってもいいのです」

ペニスをいじられながら、そのようなささやきを受けるとは思ってもいなかった。

女は既に貫頭衣を剥ぎ取り、豊富な肉体と、背中に生えた小さな翼と、尻から生えた小さな尻尾をむき出しにして、自分の股間に跨ってきた。かすかに、鼻の奥に甘い香りが漂う。

自分のペニスは既に発射寸前のところで焦らされており、自分の視線はかすかに湯気を上げる女の股間に釘付けになっている。

「それは、一体……?」

問いかけることができたのが、自分の最後の理性だった。

「あなたは魔界に強大な勢力を持つ諸侯の一人、調

律者、スタルトの血を引くお方……。人間の世界の理屈など無視して、魔界のルールで領土を奪い、支配するのがふさわしいのです。私はアスタルテ。あなた様にお仕えし、あなた様をその血筋にふさわしい魔人へと教育するのが私の務め……」

それだけ言うと、アスタルテと名乗った女は上体を倒し、自分に身体を重ねゆつくり唇を重ねてきた。

唇から彼女の細い舌が侵入し、僕の舌を引っ張るように絡みつく。自分とは別の体温を感じる。

唾液を吸い取られ、戻される。呼吸の匂いさえも甘い。

「あなた様はこれから、多くの女を犯し、命を奪い、この世界を蹂躪し、支配していくのです。では、まず手始めに……私を支配し、蹂躪してくださいませ」

アスタルテのしなやかな指に導かれて、自分のペニスがアスタルテの秘所に差し込まれていく。

「う……うわあ……!」

思わず、声が漏れた。

圧倒的な舌技で射精寸前の状態で焦らされていた。



ニスは、一気に膣内に導かれたその瞬間に射精し、大量の精子を注ぎ込んだ。

「圧倒される快感の中、意識が真っ白になるような射精感に精神が押し流されそうになる。」

思考が止まる。ただ、このままこの女の……アスタルテの体の奥底に、自分の精を叩き込みたいという、快感を求める思考だけに頭が占拠される。

すべての精子を出し切った後、アスタルテはこころなしかふくらんだ自分の腹部をなでると、愛おしげに微笑んだ。

「うふふ、こんなに温かくて、いっぱい……。ご主人様、これから私はあなた様の僕しもべとして、教育係としてお側に仕えさせていただきます。まずは、ご主人様のお名前をお教えくださいませ……」

「な、名前……。エリオット…….だけだ」

アスタルテの顔は、邪悪な魔族とは信じられないような真摯さと、それでいて信用していいかはわからないような淫らさを同時に浮かべ、微笑んだ。

「エリオット様、私のご主人様。アスタルテがこれか

らあなた様を王へと導きます……」

それは、僕に向けてではなく、自分自身に言っているのかもしれない。

とはいえ、そのときの僕にそんなことを考える余裕があるわけもなく、再び腹の奥底にたまりだした精を発射したくて、腰をムズムズと動かしていた。

「あの、アスタルテ…….っていつたつた。その……」

言葉を終える前に、膣内に残されたペニスが衰えていないことがわかったのだろう。アスタルテはペニスが抜けないように器用に回転し、尻の双丘を突き出す。矢じりのような尻尾が、ペニスに絡みつき、内部へといざなうようにしごきたてる。

「ええ、エリオット様。まだまだ夜は長いんですから。もつともつと、あなたの欲望をぶつけてくださいませ……」

僕の腰の上に、アスタルテのきれいな尻が乗る。

あまり重くもない体重が心地よい重みとしてのしかかり、熱の冷めることのない彼女の体内に僕自身は飲み込まれたままだ。

じわじわと快感が包み込んでくるが、アスタルテは動かない。腰がムズムズと動くものの、先ほどのように自分で腰を振ることはなく、時々腰を悩ましげにぐねらせるのみ。

尻から腰にかけて、骨を覆うように柔らかい肉が覆っているのが見えるようだ。尻が少し動くと、腰骨が動き、それに合わせてつややかな肌が動く。

汗の臭いが漂う。接合部からも、精液と愛液の混じり合った匂いが漂ってくるように思える。

「あの、アスタルテ……」

これだけでも十分に気持ちはいいのだけれど、もっと強い刺激が欲しい。アスタルテに言葉をかけると、彼女は背中越しに振り返りにつこりと笑う。

「あら、どうされました？ 私に遠慮をする必要はありませんから、お好きに動いてくださいませ……そう、無理やりにでも、あなたが気持ちよくなるために」

挑発的なその言葉は、僕を操ろうとしているのだと判断できた。それでも、理性は感情に……いや、快樂に負けている。

もっと動きたい、もっと突き刺したい。上半身を起こし、背後からアスタルテの胴に手を回す。手が彼女の大きな乳房に触れ、一瞬どうしようかためらうが、構うものかと抱きつく。

「あははっ、そうです。その積極性が欲しかったんです。さあ、エリオット様、私のご主人様、次はどうなさいますか？」

振り向いた彼女の顔は、欲情に濡れているものまだ冷静なようだった。腰を軽く振る。胸を突き出すようにして、僕の手の甲に手を合わせてくる。誘っている、いや、誘導している。

「……なるほど、これも君の教育、か」

腰の上にアスタルテが乗ったままでは、まともに身動きは取れない。つまり……

体をひねるようにして、アスタルテの体ごと横に倒れる。きやつと軽い声を上げて、アスタルテが脚を動かし、僕の体の横に降りる。僕を包み込む柔らかい膣内から外に出るのは少しもつたないが、こうしないと次に進めない。

立ち上がり、膝立ちになろうとしていたアスタルテの尻をつかみ、引き寄せる。ひとときわ強く、彼女の膣から甘い匂いがするように感じた。

「あん。さあ、どうなさるのですか?」

そう問いかけるが、彼女の尻尾は既に僕のペニスに絡みついて、引つ張っている。

「アスタルテ、尻尾はもう答えを教えてくださいませんか?」

「……あら、そうでしたわね。他の場所がお好みでしたら、それでもかまいません……あん♪」

答える途中に、我慢できず後ろから彼女に挿入する。中腰の姿勢だが、そんなことに構っていられるほど僕には余裕がなかった。

一気に突き込み、ゆっくりと引き抜く。抜け落ちる直前までいったら、さらに突く。技量も何もない、獣のような出し入れの繰り返しだけで気が遠くなるほど気持ちがいい。とろりとした愛液がかき出され、床に染みを作る。

経験値でかなうわけもない。ならば、がむしゃらに

むさぼるしかない。アスタルテの思惑はわからないけれど、今の僕にはそこに考えが至るわけもなく。

「はあっ……はあ、はあ……うっ」

気を抜けば、すぐにも射精しそうになるのを、力を入れて抑える。

「あら、我慢しなくてもいいのに……ほら、胸もお使いくださいませ」

そう言うと、アスタルテはわずかに上半身を持ち上げて、両手を床につく。床に押しつぶされていた胸が持ち上がり、大きく揺れるのが背後からでも見て取れた。

「くそっ……そんなこと言われても……」

両手をアスタルテの尻から離し、さらにのしかかるようにして背後から胸をわしづかみにする。力加減もわからないから、なでたりさすったりして、だんだんと力を強くしていく。柔らかい。幼いころには母親の乳を吸っていたはずだが、感觸まで覚えているわけではないから、乳房がこんなにも柔らかいものなのだと初めて実感した。

「もっと、強く……乳首を、押しつぶすようにしてもかまいません。経験のない娘なら話は別ですが……今は、どうすればあなたが気持ちよくなるかだけを考えて……」

そんなことを言われても、これ以上どうすればいいのなんて見当もつかない。ただ無茶苦茶に腰を振って、胸をもんで、背中に、首筋に唇を当てて吸いつく。わずかに、汗の味がした。

自分の体は、もう既にそれなりの汗をかいてしまっている。アスタルテも汗をかくのだとわかって、少しだけ安心する。その瞬間、張り詰めていた我慢が限界に達し、背後から押し付けるようにしたまま、アスタルテの膣の奥に射精してしまう。

「あ……あつい……まだ、こんなに出る……」

嬉しそうに、アスタルテが声を上げる。その声はまだ余裕があるようで、自分ばかりが絶頂に達していることをなんとなく自覚させられる。なんとかして、相手も気持ちよくさせてやりたいとちよつとした負けん気が頭をもたげるが、まだどうにもその手段がない。

力が抜け、アスタルテの背中に体重をかけて倒れこむような形になってしまふ。いくらなんでも、手をつけて体を支えている女性の体に乗ったままとするのは少し恰好がつかないような気がして、まだだるい体を動かして横に腰を下ろす。

「……まずは、女の体がどういうものか、どう使うのかを大まかにはご理解いただけましたか？」

立ち上がったアスタルテが、胡坐あぐらをかいて座った僕の前にやってくる。

ちょうど、目線の位置に彼女の股が位置するため、そこから脚に垂れる白濁した液体が見える。自分が吐き出した体液なのに、彼女の脚を汚すそれはまるで自分のものではないようで、つい見つめてしまい、気恥ずかしくなって目をそらす。

今度は胡坐をかいた僕の脚に跨って、アスタルテが体をすり寄せてくる。太ももに擦り付けられる陰部の熱が伝わる。上半身を傾け、僕の胸に体を預けて耳元でささやく。

「初心はつこころなのも魅力的ですけど、あなたにはもっと多

くの女を抱いてもらわなければいけません。魅了して、快樂に墮として……だから、もっと強欲におなりくださいませ」

耳に息を吹きかけられる。舌が音を立てて、耳たぶを、首筋を伝わっていく。両手は軽く肩に置かれ、乳房を押し当てたり、わずかに離したりを繰り返す。まるで、猫が毛づくろいをするような愛撫に、射精後で萎えていたはずのペニスがかむくむくと欲望を取り戻す。

「ふふ、やっぱりお若いですね。もうこんなに……」

そう言って、目線を僕の股間に移すアスタルテ。目線がそれたそのとき、腕を回して腰を抱えるように抱き寄せる。少し驚いたように、アスタルテがこつちを見る。

唇を奪う。知識の上では知っているし、さつきもつながった状態で何度も口づけは交わしたが、僕のほうから意図して奪うのは初めてだ。とはいえ、細かい位置の調整などは僕一人でできるわけもなく、アスタルテの協力があつて初めてできたようなものだろう。もう片方の手で頭を押さえるとかすればよかつたと思つ

たが、いささか遅かつた。

唇を重ね、今度は自分のほうから舌を差し込み、アスタルテの口の中を探索する。すぐにアスタルテの舌が迎えに来て、しばらくの間舌を絡め合つてすごした。お互いの呼吸が口の中を通りぬけ、鼻腔を刺激する。

腰の位置を少しずつずらして、アスタルテが脚の上から腰の上に移動しようとしている。両手をいったん離し、抱き合つたままアスタルテの尻を持ち上げて、自分の真正面に向き合うように座らせる。屹立した僕のペニスがアスタルテの下腹部に押し付けられる。アスタルテの両腕が僕の背中と後頭部に回され、密着するように強く抱きついてきた。

「積極性を持たれるのは……んぶ……よい、傾向です……」

言われるまでもない。それに、もう我慢ができない。腰の位置をずらし、強い力でもう一度アスタルテの尻をつかみ、持ち上げる。何がしたいのかは彼女にも伝わったのか、こちらに合わせて腰の位置を調整する。僕の先端が入り口近辺に擦り付けられるのだが、お互

い唇を重ねたままなのでうまく位置が合わせられない
……入った！

にゅぷ、と小さな音がしたような気がした。再び、
最初のときと似た角度で僕はアスタルテの膣に入り込
む。小さく、それでも確実にアスタルテの背中が反り、
重ね合わせた唇から甘い声が漏れる。

「教えてほしいんだ。君を気持ちよくする方法を。君
を蕩けさせて、多くの女を堕とすためのやり方を」

そう告げて、首筋に強く唇を押し付ける。まだとて
もかなわなけれど、いつかこの女を僕のものにする
ために、せめて少しでも印をつけておきたい。

「……ええ、お教えします。このアスタルテが、あな
たを王へと導きますから……だから、私もよくなつて
きたから……もう一度、奥に！ あなた様の精を注い
でっ……！」

言葉を遮るように、もう一度唇を奪う。尻を強くつ
かみ腰に押し付けると、アスタルテも僕の背中に強く
抱きつく。そのまま、どれくらいの時間が経ったのだ
ろう。ほんの数十分か、あるいは何分も経ったのか。

絡み合い、唇を吸い合い、汗にまみれたまま、突然限
界が訪れた。

「うあっ!？」

「ああっ……出てる、まだ、こんなにたくさん……エ
リオット様の、精液……」

腰が跳ねる、アスタルテの体も大きく震える。数秒
間の絶頂の後、お互いに力が抜けてしまい、僕は背中
を倒し、床にあおむけに寝そべる。アスタルテは僕の
胸にもたれかかるように体を倒し、つながったまま僕
の上で荒い息を吐いている。

暗い部屋の中、目が慣れてきたのか、見慣れた天井
を見上げる。

体にのしかかる、アスタルテのわずかな重みが心地
よかった。

※ ※

「はあっ……あっ……！」

全身から湯気を上げながら、アスタルテが僕の身体
に自分の身を預けてくる。

自分が彼女の膣内に精を放ったのはもうそろそろ十

回近くなるが、ようやく彼女に満足を与えられたのだろうか……そんな思考ができるほど、ようやく冷静になつてきたともいえる。

正直、何をどうしていたのかあまり記憶がない。

ただひたすらに、唇を合わせ、舌を絡め、蕩けるような肉壺にペニスを突き込むことだけに精一杯だったのだ。

猿のように、という言葉がびつたり当てはまる形で、僕は女の身体に溺れた。気がつけば、冷たい土間の床で何時間も絡み合つたまま、朝を迎えてしまった。

夜明けの時間帯特有の冷えた空気が流れ込み、そろそろ寒い。このままではお互い風邪を引いてしまうかもしれない。……汗くらはい流したほうがいいかもしれない。

今の時期は客がいなから助かったが、本来であれば客を迎え入れる土間が精臭であふれかえっている。さて……

「うん……エリオット様、まだお元気……」

復帰したアスタルテが膝立ちになって、背後から自

分の腰に手を絡めてくる。背中と尻の中間あたりに吐息がかかつてくすぐつたい。

彼女の指は再び自分のペニスをもてあそび、再戦を挑ませようとしている。

「流石にもう無理だよ。それに、客が来るかもしれない時間帯だ。この部屋を掃除しないと」

「あら、では部屋を変えればいいのですね？」

からかうように言うものの、状況はわかっているのだろう。

振り返ると、既に幻術をかけなおしたのか、アスタルテの外見は昨日見た修道女風の衣服に変わっている……身体を洗ったわけではないので、むせ返るような精臭は隠せていないのだが。

「では、いったん部屋をお借りしますね……あら、誰か来たようですね」

※ ※

「……エリオットさん、起きてますか？」

ドアの前で声がする。声には聞き覚えがある。

農民たちは既に起きているが、鉾山の男たちはまだ

寝ている時間で、自分も普段はぎりぎり寝ている程度の時間だ。この時間の来客は珍しいが、来た人物が誰かはわかる。

村の農夫の娘ダリア。成人してはいても、自分とは少し世代が違うため、子供のように一緒に遊んだり嫌われたという経験はない。

村の中ですれ違ったり会ったりする程度のことではあつただろうが、彼女たちが村の子供たちのグループに加わるころには、僕はもう村の子供たちの中では孤立していた。

自分に対して表立つて敵意を向けない数少ない村人であり……半年前に唯一の家族であつた父親が死に、「村人」から「村の共有財産」になつた娘だ。

そのため、村人が嫌う僕のところ、食料やその他の産物を届けてくれる（もちろん、対価は払っている）役目を負うことになつたかわいそうな娘と言うべきか。

今は村長の家で世話になつていらしいが、そのうち……あるいは既に若い男の精処理の役目を負っているのだろう。

容姿に派手なところは無いが、村娘としては器量も悪くはないし、そのうちに誰かが嫁にするのだろう。それが幸いなのか、不幸なのか、僕にはわからないが。彼女とまともな面識を持ったのは（やはり僕を嫌っていた）彼女の父親が死んで以降のことなのだ。決められた時間以外にここに来ることはない、彼女も村に居場所がないのか、ここに食料品などを置いた後に多少世間話をするくらいはあつた。

何はともあれ、扉の向こうに彼女以外の何者かがないかだけはチェックする。これは習性みたいなものだ。

「……ダリア、どうしたんだい、こんな早く」

特に異常がないことを確認してからドアを開く。荷物も持っていない。おそらくは水汲みに向かう途中に道を走ってこつちに来たのだろう。

小柄で気の小さそうな少女は、薄い茶色の髪をうなじで軽く結わえ、背中の中まで伸ばしている。濃い茶色の瞳には、戸惑いと後悔が見える。何か隠し事をしてるか、懺悔に来たかのようだ。

「……まあ、入りなよ。お茶くらいは出そう」

土間に招き入れてから、激しく後悔した。先ほどまでの精臭が抜けきっておらず、栗の花のような臭いがする。あつちもこの臭いが何かわからないような歳でも立場でもないだろう。なんとも言えずに気まずい。

「あら、ご主人。新しいお客様ですか？」

白々しくも、アスタルテが声をかける。ダリアが驚いたようにその姿を見ているが、彼女に幻術は見破れないだろう。

……臭いで別のことはわかる気がするけれど。

「あ、あの……。エリオットさん。お伝えしないと

……」

お茶を淹れるために、かまどに火を入れ、湯を沸かし始めた時点で彼女はようやく口を開いた。

「うん、こんなに早く来るからには、何か話があるんだとは思ったよ。何か、困ったことでもあったのかい？」

……僕にできることは、そう多くないけれど」

言っていて情けないが、村の部外者である自分できえることは極めて少ない。

彼女は少しうつむくと、こう言った。

「できるだけ早く、この村から逃げてください……。村長さんは、傭兵を雇ってあなたを殺すつもりなんです」

※ ※

ダリアの話を要約するところだ。

鉱山の開発の話が進み、今後は本格的に人も金も流れ込んでくる。そうなると、宿や酒場などの需要も増すし、村の発展も見込める。しかし、鉱山への道の途中にはこの宿があり、現在既に小規模ながら商いは続いている。

母の存命中に教会の発行した権利やら何やらで、僕が生きている間は（自主的に宿をたたまない限り）新しく宿の開設も難しいし、そもそもこの宿のある辺りを切り開いて村を広げるため、昔から住んでいる自分が邪魔だ。

ならば、傭兵を呼んで山の危険な動物を退治するときに、まとめて殺害し、事故死として処理してしまえばいい。

それに、あの宿には死んだお女将がため込んでいたお宝や魔法の道具があるらしいから、（形式上は村人である）僕が死ねば、それは村の財産になる。

「……はあ、母さんの財産なんて金か宝石程度で、それも僕一人が数年生活できるくらいしかなかったから、半分も残っちゃいないのに」

「……村長さんたちは、そのことはわかっていないみたいです。でも、もう決まったことだからって」

泣きだすのをこらえているようだ。自分が悪いわけでもないのに、罪悪感でも持つてしまっているのだろうか？

それにしても、嫌われ者の僕なんかによく教えてくれたものだ。

「……ご主人、もう村人に遠慮する必要はないのでは？」

アスタルテが言葉を選びながら、剣呑な提案をしてくる。

実際のところ彼女の言葉は大体正しい。相手がそこまでするつもりならば、こちらとしても黙って殺され

るわけにはいかない。

とはいえ、この美しくも恐ろしい魔族に頼めば村を壊滅させるくらいやりそうにも思えるが、自分自身にそんな力はないし、気分的にもあまり嬉しくはない。

それに、ダリアの前でそういう話をするのも嬉しくはない。その辺、気を使って言葉を選んでくれているのだろう。

「あの……修道女様ですか？ エリオットさんとは、どのような？」

話の矛先はそれる。まあ、あの臭いとこの状況を考えると、この修道女が怪しいのは明らかだろう。

「小さいころに、エリオットさんのお母様が大変お世話になって……亡くなったと聞いて、ご挨拶に来たんです」

半分以上嘘だろうが、とは思いつつも黙っている。その言葉をどう受け取ったのかわからないが、少し考えた後にアスタルテに話しかける。

「であれば……エリオットさんと一緒に、逃げてください。傭兵が来るのはおそらく今日か明日くらい……」

一緒にいると巻き込まれるかも」

……それは確かに考えていなかった。

アスタルテは魔族だ。襲われたらやり返すことは想像に難くない。

自衛はすべきだが、虐殺になるのは避けたい。そもそも、戦闘能力はどの程度あるのだろうか？

「……ダリアさんでしたっけ。あなた、なんでここに？ その話をエリオットさんしたら、あなたの村での立場は危なくなるのではなくって？」

その言葉に、そういえばそうだと気がつく。彼女には、この情報を僕に伝えて得することなど何も無い。

「その……」

困ったように僕のほうを見て、言葉に詰まる。心なしか、頬が赤いように見えたのは気のせいだろうか。……もしかして。いや、それはないだろう、いくらなんでも。

「あなた、エリオットさんのことが好きなのね？」

アスタルテが切り込む。しかも断定。それはないだろうと思っただけだが、彼女は顔を赤らめて、目をそ

むける。

「ダリア……そう、なの？」

我ながら間抜けな質問だ。

半分泣きそうな顔つきで、小さく頷く。

「あ……村のみんなからは、ひどいことばかり聞いてたけど、実際に会ったらしい人だったし……お父さんが死んでから、みんなわたしに対する扱いが変わったけど、エリオットさんだけはいつも通りに接してくれただから……」

……それはそうだ。僕にとつてダリアは会う前は「名前しか知らない他人」で、父親が死んでから時々会うようになって「村の内側にいる、立場の弱い他人」でしかなかった。

嫌っていたわけでもないし、どちらかといえば不幸な立場の彼女を自分の立場に重ねて、村人に比べれば好意的に見ていたことは確かだろう。

彼女に嫌われても生活に支障が出るから、愛想よくすることは心がけていたし、嫌っているわけではないからそれはたやすいことだった。

それでも、半年前に家族を失い、庇護を失って「村人」から「村の所有物」にされたばかりの娘には、僕の姿はまぶしく映っていたのかもしれない。たとえ、それが現状からの逃避にすぎなかったとしても。

——異性から好意の視線を受けることに、あまりにも不慣れだったためだろうか。それとも、僕がこの子をまともに見ようとしていなかったただけだろうか。

どちらにしても、それは本来お互いを不幸にしかない選択肢だっただろう。

「エリオットさん、どうせならその子を抱いておしまいなさいな。どちらにせよ、この村にはもういられないでしょうし」

アスタルテの言葉は無茶苦茶だが、後半は正論だ。しかし、今すぐに逃げるのは無理だ。どこかに移住するにしても、財産がなければ生きていくことはできないし、この辺鄙な鉦山村から近隣の街までは馬車でも半日、徒歩では数日かかる。

村人の搜索範囲から逃れることを考えれば、人の出入りのある一番近い街ではダメだ。せめてその先にあ

る大きな都市……水門都市と呼ばれる、この国でも何番目かに大きな都市まで逃げる必要があるだろう。

そこまで行けば、多くの人の中にまぎれることは容易なはずだ。

「……この村から逃げないといけないことはわかった。ただ、今すぐには無理だ。今後のことを考えると、無理しても今日一日は準備に費やさないと厳しい。明日の朝早く、夜明けの鐘がなる前には村を出よう」

口に出せば、決意も固まる。

もう一つ、思いついたことがあった。

「ダリア。……君も来るかい？」

好意からだけで言ったわけでは、残念ながら、ない。彼女は自分に異性として好意を寄せてくれているし、わざわざ自分にこのことを教えてくれた。自分としては、村人の中では唯一好意を持てる相手ではあるが、女性として、恋愛や性の対象として意識したのはついさつきからだ。それでも、利害は一致する。

彼女には庇護者がおらず、自分にはよその都市に移住したときの窓口となったり、社会的な身分を得るた

めの相手がいない。

このご時勢、戦乱で難民となる人は少なくない。どこか遠くの都市に逃げて、夫婦として暮らすこともできるだろう。アスタルテには悪いが、そんな選択肢もある……

「……っ?! いいんですか、わたしなんか……」

彼女の目じりに涙が浮かぶ。自分の好意が受け止められるとは思っていなかったのかもしれない。まあ、傍目に見てもアスタルテは美人だし、彼女と寝たことは部屋の臭いでばれているだろうから、そういう関係だと思われているだろう。

「ダリア、これは、善意とか、好意だけの問題じゃないんだよ。僕が逃亡先で生活するときに、君と一緒にいればある程度有利になると考えたからだ。……それに、君に心変わりされて、告げ口をされても困るしね」
なんとなく、正面から顔を見るのが気恥ずかしい。

照れ隠しに、計算のことをあえて口にした。

「……ありがとう、エリオットさん。わたし、戻りませんね。あまり遅くなると疑われちゃうから……。夜明

け前には、必ずここに来ます……」

ぺこりと頭を下げると、少女は小走りに森の中を村に向けて去っていった。

あの子が嬉しそうに笑ったのを見たのは、初めてかもしれない。

※ ※

「……いいんですか、今抱いてしまえばあの娘は逃げられなくなつたのに」

アスタルテが少しだけ不満げに言う。今すぐにダリアを抱かせたかったらしい。

「なんで、そんなに女を抱かせたがるんだい？」

「それは簡単なこと。あなたは女を抱いて、精と心を奪えば奪うほど……魔族としての力に覚醒していくからですわ」

……それはどういふことだ？

「意外そうな顔しないでください、エリオット様。さっき言ったでしょう？ 『あなた様を王へと導きます』と。まずは、並の人間ごときに倒されるようではいけませんので、手早く戦うための魔力と、下僕を作るこ

とを覚えていただきませんか……」

ちよつと待つてほしい、ダリアを抱くことと魔力を得ることの関連性がわからない。

率直にそのことを伝えると、軽いため息と共にこんな返事が返ってきた。

「手っ取り早く説明しますと、あなたのお父上はいわゆる魔族の中でも夜魔、^{ナイトメア}その中の淫魔^{インクブス}といわれる類の魔族でした。異性を淫らに誘惑し、墮落させ、そのときに相手の心を支配する……時には気に入った相手を魔族に変えて、そばに仕えさせる。その血筋が、力がエリオット様にも受け継がれておられるはずです」

……つまり、女を抱くことで魔力が増え、いずれは女を抱くことでその相手を支配できる？ 無茶苦茶だ。

「エリオット様は、魔法の才能をお持ちではありませんか？ ……心当たりがあるようですね。その魔法の力は、もしかすると付与魔術に近いものでは？」

……凶星だ。返す言葉もないが、どうやら表情ですべて理解したらしい。

「その力こそが、証明。既に自ら才能を開花させてい

るのは、大変すばらしいことです。自分の魔力を自分以外の相手に付与することは、あなたのお父上を持つ特殊な力でした。並の淫魔にはないその才能こそが、あなたのお父上を魔界の実力者にしたのです。……物質に魔力を与えるように、生き物に魔力を植え付けることで魔物への変化を促進し、己の望む姿へと変えていく。それこそが、調律者の血筋の証」

……無茶な話だが、一応の筋は通る。

魔法の理論などはかじっただけで、詳しいわけではないが、物質に魔力を付与するように、生き物に魔力を付与することは不可能ではない。それでも、自分が知識の上で知っているのは、一時的に身体能力を上げたりする程度のものだ。

精神を墮落させ、屈服させて支配下に置く。これはわかりやすい。魔力なんかなくても、権力と暴力があれば、他人を屈服させ支配することは容易なのだから。それでも……人が魔物になるなど、ありえるのだろうか？

「ええ、ありえるのです。エリオット様。その証拠は、

あなたの目の前におりますので。……わたしがなぜあなたの母親を知っていたのか、不思議ではありませんか？」

アスタルテが近づいてきて、椅子に座った自分の後ろに回る。後ろからゆつくりと抱きつき、耳元に口を近づけてきて、ささやく。

……今の話聞いて、予想はできていた。なぜ母を知っているのか、母を訪ねてきたのか。

「私はあなたのお父上によって、人間から魔物へ……淫魔へと変えられました。あなたの母上……アムローザとは昔、共に戦った仲間。魔物になって、歳を取らなくなつて……今、アムローザとあのお方の息子に抱かれるなんて、運命とは不思議なものですな」

背後の女体から、むせるような性の臭いが届く。頭がくらくらとする。逃げる準備をしなければいけないのに、身体は女を求めて衝動を高めている。もしかして、この女は僕を……

「私も、多少ながら人を魔物に変える術は心得ています。けれど……あなたは既に半分は魔物。変化を多少

早くするのが関の山でしょうね。でも、あなたの心はまだ人間のもの。人を殺して魂を食らうことまでは求めませんが、魔族としてふさわしくなる程度には心も強くなつていただかないと……そのために、さあ」

既に窓からは朝日が差し込み、森を越えた村では既に朝の農作業が始まっているころだろう。

母の友人だったという女は衣装をすりと落とすと、背後から耳たぶに舌を這わせる。

「もう一度、アスタルテを犯してくださいませ……」

ダリアが立ち去つた後、さつきまで彼女が座っていたその場所で、僕はアスタルテを後ろから犯した。

※ ※

逃げ出す準備は、夕方には終わった。家財道具などで持ち運べないものは最初からあきらめた。

価値のある本なども、最小限以外は置き去りにする。食料は小型で保存が利くものと、今日明日で消費する分だけ。

持ち運びの可能な宝石や硬貨、貴重品、薬品。そして売って金にできるだろう魔法の道具たちと、それを

作り出すための工房内にあった道具類。衣類などは最
小限にとどめても、大型のトランク二つ分になる。

念のため、宿の周囲には見張り用の「目」をぎりぎ
り遠くまで設置し、最も遠くのもの森の木の上に置
き、村の様子を遠くから見えるようにした。

使うことはないと思うが、注文を受けてまだ渡して
いない武器や罫を準備して、いつでも使えるように
してあった。

願わくば、やってくる傭兵たちが鈍重な連中である
か、契約にまじめな連中で、契約外の仕事をこねてく
ればありがたい。その分逃げる時間が取れるという
ものだ。

この村によく来ていた傭兵たちは、小規模な傭兵団
が多かったが、そのほとんどが母の知人や元愛人だっ
た。そのため、土地勘のある傭兵は僕を殺すことをた
めらうのはわかっているし、村長たちもそれは理解し
ている。おそらく、近隣の都市から、普段付き合いの
ない傭兵団を選んで雇うのだろう。

可能性があるのは、鉱山技術者たちや、鉱山の開発

を行う貴族からの紹介だろう。流石に貴族の私兵が来
ることは考えにくい。相手に土地勘がないだろうこと
が、唯一の希望だ。

昼過ぎからはアスタルテも身体を求めてくることは
なく、僕は淡々と作業をこなしした。

日が暮れる前に仮眠を取り、夜のうちに目が覚めた。
日の出まではあと数刻ある。あとは、夜明け前にダリ
アが逃げてきたらそれに合わせてこっそりと村を出る
だけだ。

あの子がいなくなつたことがわかるまで、おそらく
半日。追ってくるかまではわからないが、昼までには
できるだけ距離を稼がなければいけない。

この季節は幸い、川沿いの小屋までたどり着けば顔
なじみの行商人か、傭兵たちの御用聞きがいるはずだ。
彼らは村人よりも僕のほうに近い。多少の代価を払う
必要はあるが、頼み込んで馬車に乗せてもらえれば、
まず逃げ切れるだろう。

「……エリオット様、水盤に変化が」

アスタルテの声は明らかに警戒を促すものだった。

急いで水盤の前に向かい、最も遠く……村を遠くから見下ろせる「目」の見える風景を覗き込む。

遠くの風景で、映像は薄ぼんやりとしているが、明確に他の映像との違いがあった。夜明けにはまだ早いのに、その映像だけは一部が明るくなっている。

村が、燃えていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>